

深夜の大阪・難波。営業時間はとくに終わったはずのアイススケート場から、かすかな光が漏れる。リンクをのぞくと、ブラシに先導されながら、氷上を滑るストーンが目飛び込んだ。

日本中が沸いた約1年前のトリノ五輪を思い出す光景。ストーンの滑らかな動きは重力を感じさせない。カーリングだ。

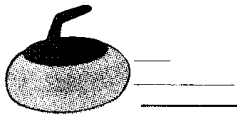
女子日本代表チームの活躍で注目度が上がったカーリング。寒い地域だけの競技と思いがちだが、関西にも取り組む人々はある。2府4県の競技者を統括するのは京都府カーリング協会。拠点だった京都のスケート場が閉鎖されたため、現在はこの「浪速アイススケート場」を練習場としている。

リンクはいつでも使える訳ではない。早い時間帯は、未成年者の多いフイギューアなどが優先される。このため、練習時間は他の競技との抽選となり、貸し切りで使えるのは月2回程度。人が集まるのが可能な週末の深夜が多く、終電で参加し始発で帰る人もいる。

練習前には、氷上にシャワー状の水をまき、ペブルと呼ばれる氷の粒を作る。摩擦を減らし、ストーンを遠くに滑らせる大切な作業だ。練習はフォームの確認や投球感覚のチェックが中心。競技を行う専用のレーン(シート)がないため、「ハウス」と呼ばれる的となる円がないからだ。

同協会は多くの人にカーリングを楽しんでもらおうと、初心者体験教室を行っている。だが、時間帯などが理由で残る人は少ない。同協会事務局長の石垣留美さん(32)は「せめてハウスが

関西カーリング事情



H19. 1. 23



深夜のカーリング教室で講師(右)の説明を熱心に聞く参加者。13日午前1時10分、浪速アイススケート場

あれば。平日でも来たいという人が多いのに……」と悔しさをにじませる。

厳しい関西の事情。しかし、石垣さんは「老若男女やパワーの差に左右されることが少ない競技。条件がよければここから五輪選手だって出る。眠っている才能を見つけてあげたい」と話す。

ある日の深夜、岡山県内のスケート場にハウスを求め遠征してきた京都府協会女子代表チームの姿があった。交通費を抑えるために乗り合いで移動するなど苦労は多いが、氷上で見せる笑顔は明るい。

カーリングはメンタルスポーツ。このひたむきさがあれば、関西から五輪選手が生まれる日はきっと遠くないはずだ。(写真報道局・吉澤良太)